

夫婦でひろめた生ごみリサイクル活動



恒川 敏江・芳克 (NPO緑の会)

<芳克>

気が弱くていつも二人でやって参りますが、隣が家内の理事長で、私は平の理事です。緑の会の設立経緯から理事長がお話します。

<敏江>

主人は仕事がありますので、役柄は私がさせていただいています。

以前から地球にとって私たちの生活はこのままでいいのだろうかという気持ちがずーっとありました。どこからどうしたらいいだろうとずーっと引きずっておりました。

平成6年に微生物のEMで生ごみ処理をすることを知りまして、生ごみをバケツに入れEMをかけると非常に有効にリサイクルできる。やってみますと野菜はよくできるし土もふかふかになるし、素晴らしいと思い一人二人と話し、それでは会を作ろうということで「EM緑の会」を作りました。畑のある人はいいけれど、埋める場所がないということで、主人が造園業をやっていますのでトラックなど準

備して回収し、家で使いその代わりにできた野菜を配るということでやりましたが、平成6年から10年までは完全なボランティア。それ以降は地球環境基金、今年ががんばれNPOという助成をいただき、200世帯までになりました。将来的には役所に行政サービスとして生ごみの分別収集をしてもらうためにやってきましたら、ようやく役所が本気になってくれてまして、来年度1,000世帯のモデル事業として予算を組んでくれることになりました。

今日始めて協同労働のお話をうかがって、おぼろげながらそういう形の事業になったら素晴らしいなど、1,000世帯のモデル事業をシルバー人材センターに協力していただいて、私たちNPOのメンバーと、足りなければ若いボランティア募集と、事業ですから有料ですが、ボランティア精神で1,000世帯やってみて、いい方法が編み出せたら取手市の3万世帯に広げていくということです。

この活動の方法について主人の方からお話します。

<芳克>

私が生ごみリサイクルの方を担当しており

ますのでご報告をさせていただきます。現在の207、208世帯の回収と堆肥化作業を行っています。EMにおける生ごみ処理に欠かせない「EMほかし」は、EMという微生物を米糠と粗穀で代用した物を作り、それを生ごみに振りかけて作るという作業をしています。「ほかし」が必要で当初私が作っていたのですが、開発をされた比嘉先生のお考えがありまして、障害者の施設でということ、取手市の知的障害者施設「つつじ園」で作っていただいています。

公の施設でお願いするというのは大変な手間と時間がかかりまして、3年くらい通ってやっとできるようになりました。回数は週1回。月曜から金曜は市のごみの収集がありますから、集積場が空く土曜日に回収します。金曜の夜、空の100リットルのプラスチックのタンクを置きまして、土曜日の朝9時までに生ごみを入れてもらってトラックで回収します。堆肥化しているのは市から借りている屋根付きの場所で、下が土の方がいい堆肥ができるのですが、法的な問題があって、今は下がコンクリートで屋根付きの施設を借りています。酵素風呂（おが屑に首までもぐって自然発酵してくる熱で10分、15分入る風呂）をやっている方がいまして、そこで出る廃棄物としてのおが屑をもらってませ水分調整（生ごみの90%は水分）をして、攪拌用のバックホーで切り返し、1週間置いて、また回収してきたものを混ぜるといった単純な作業です。約3ヶ月でできあがった堆肥をふるいにかけて、生ごみを入れてくださる方にお分けしているのですが、大変好評でいつも在庫がゼロです。ほとんどが家庭菜園に使われています。

が、去年は22トンの生ごみが焼却されずに資源としてできあがりました。

来年度から1000世帯のモデルが始まります。その1000世帯から何万世帯に増やしていきながら、シルバーの方たちや子どもたちと、今EMで完全無農薬・無化学肥料の農業が確立されてきましたので、その野菜を学校給食や病院でも使って欲しい、栽培からできあがった野菜の循環まで大きな夢を、市役所の担当の方と検討しています。

<敏江>

やはり回収をされている岡山県の船穂町に見学に行きました。生きがいを感じてみなさんが楽しくやっていたらいいのを見て、取手市でもやれたらいいと思います。それには今日勉強させていただきました、協同労働を改めて学習させていただかなければと思いました。

つつじ園の方が楽しくなっています。資材をクリーニング屋さんとか薬局とかで売っていますが、それをお母様がうちの子どもたちが作っているんですと誇らしく話して下さいました。園の方では景気に左右されないで、毎月ほぼ決まった量が出るのでありがたいと言ってもらっています。

この活動をさせていただけることに生きがいを感じています。私が以前インドへ行ったときマザーテレサさんにお会いし、「私たちのやっていることは大海の一滴ですよ。でもその大海も一滴からですよ」その言葉が背中のだこかにありまして、一滴が大海なんだという思いで活動をさせていただいています。